

所 報

第 4 4 号 2001年 8 月発行
発 行 人 高 嶺 朝 勇
発 行 所 沖 縄 県 立 教 育 セ ン タ ー
〒904 2174 沖 縄 県 沖 縄 市 宇 与 儀 587 番 地
電 話 0 9 8 - 9 3 3 - 7 5 5 5
F A X 0 9 8 - 9 3 3 - 3 2 3 3

『 卷 頭 言 』 所 長 高 嶺 朝 勇

所長
写真

文部科学省は、新世紀が始まる本年（2001年）を「教育新生元年」と位置付け、教育改革の一大国民運動を展開している。沖縄でも、去る5月26日に県立武道館において「沖縄県21世紀教育改革フォーラム」が開催された。

大変有意義なフォーラムであった。

特に、文部科学省の御手洗審議官が基調講演し、気軽に質疑に応じておられたのが印象的であった。

参加者の多くが「21世紀教育新生プラン」への理解を深めたことと思う。

しかし、「学校、家庭、地域の新生～学校がよくなる、教育が変わる～」と言うサブタイトルの付いた「21世紀教育新生プラン」は多岐にわたって膨大で、専門性の高い内容である。具体的には、7つの重点戦略（レインボープラン）に焦点化し、推進されるが、その実現のためには、関係者の間で十分にすり合わせを行う必要がある。教育改革の当面の急務は、全ての関係者の共通理解ではないか。当センターとしても、各部署で内容を良く咀嚼し、本来の役割を果たしたいと考えている。

さて、当センターでは、6月29日に情報教育長期研修（3ヶ月）の修了式が行われた。それに先立って28日には、研修成果報告会が行われた。16名の研修員の報告は、3ヶ月と言う短期間の成果とは思えないほど充実していた。IT教育の推進は教育改革の目玉の一つである。これからの学校は校内LANの整備が緊急に求められていて、その管理運営に係わる教師の養成が求められている。そのための3ヶ月研修の導入は、成功したと自負している。

また、当センターでは6月の第1週から第2週にかけて中学教師を対象に夜間のパソコン入門講座を実施したが、旅行命令を伴わない勤務時間外の自主講座であるにもかかわらず、34名の方が熱心に受講した。ほとんどが50歳代の先生方で、中には校長先生が1人、教頭先生が3人おられた。現場の危機感を感じた。

教育改革と相俟って、厳しい行政改革が進行する中で沖縄県では、国の肝入りで「IT教育センター

（仮称）」の設置が来年度に予定されている。IT教育の推進は当然のこととして国際化の側面を伴っている。「IT教育センター（仮称）」の設置と、小学校における「早期英語教育」の推進を念頭に、当面、英語教育研修の強化を図るつもりである。

現在、全国の教育センターにカリキュラムセンターとしての役割が求められている。同時に、教育改革を進める上で研修事業・調査研究も、これまで以上に重要である。増大する教育需要に対応するために、職員一人一人の力量を高め、知恵を結集して期待に応えたい。幸い、時間外や休日の「自主講座」を開設できるほどに職員の意識は高い。

今、大事なことは、激動する改革の流れの中で、教師が自信を失わないことだと思ふ。私共としては、各学校が、従来から力を入れて取り組んで来た学力向上対策の成果を高く評価し、教育改革の流れとの整合性を確認しつつ、地に足をつけて勇気をもって改革に立ち向かうことができるよう支援を強化し、現場の先生方と共に歩みたいと願っている。学校から頼りにされる教育センターをめざしたい。

目 次

所長あいさつ	1
研究室だより	
【情報処理教育課】	2～3
「コンピュータの操作ができる」から「コンピュータで指導できる」へ	
【教育経営研修課】	4
「今なぜ、社会体験研修なのか？」	
【理科研修課】	5～6
「野外施設、教育実習園の整備・充実に向けて」	
【教育経営研修課】	7
「全国適応指導教室連絡協議会(四国・九州地域会議)沖縄大会へむけて」	
トピックス紹介 【理科研修課&産業教育課】	8
「センターには蝶がいっぱい」、「メロン栽培への挑戦」、「高付加価値メロンめざして！」	

「コンピュータの操作ができる」から「コンピュータで指導できる」へ インターネット接続と校内LANの整備，IT授業への対応

情報処理教育課

平成11年に報告された，ミレニアム・プロジェクト「学校の情報化」において，2005年度を目標に，全国の学校のすべての教室にコンピュータを整備し，インターネットにアクセスできる環境を実現する政策が明示された。これを踏まえ，「2001年度までにすべての公立学校（約39,700校）にインターネットに接続でき，すべての公立学校教員がコンピュータ活用能力を身につけられるようにする」教育の情報化の推進が図られている。また平成13年には「e-Japan戦略」や「21世紀教育新生プラン」が出され，「学校の情報化」が急テンポで進み，教育が大きく変わろうとしている。

図1は，本県の平成12年3月末の「コンピュータ等を操作できる教員」「コンピュータで指導できる教員」の調査結果である。いずれの割合も全国平均より低く，教員の情報活用能力向上を図る情報教育研修の充実が課題となっている。

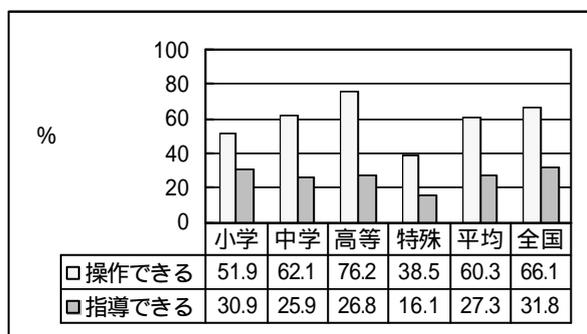


図1 平成12年度学校における情報教育の実態等に関する調査結果より

本県においても，全ての教室からインターネットに接続し授業で活用できる校内LANを含めたネットワーク環境の整備が進められているが，物理的な環境は整備されつつもこの機能を維持・運用する人材の養成は十分でなく，その養成が望まれている。さらに，学校現場では授業や校務処理での情報化の機運も高く，LAN上で動作するコンテンツの導入や開発の要請も強い。このような現状を受けて当センターでは，いくつかの新しい研修事業を計画している。6月までに終了した二つの研修を通して，これからの情報教育と学校におけるコンピュータ活用について考えてみたい。

教育の情報化推進リーダーを目指して

情報教育長期（3ヶ月）研修

「高度情報通信社会に対応した教職員として素養の深化を図るとともに，ネットワーク（LAN）や情報教育についての専門的な知識を深めて，実践的能力を高め，学校の情報化を積極的に推進する校内リーダーの育成を図る。」ことを目的に情報教育長期研修（3ヶ月）を実施した。

普通高校8名，特殊教育諸学校8名の計16名の研修員が4月から6月までの3ヶ月間研修に取り組んだ。研修内容は「教育の情報化」の推進を担うための基礎知識から教材や校務処理ソフト作成の実践的技術の習得にまでおよび，32講座が開設された。主な実践力養成講座として，データベース（ACCESS）の基礎からVBAを駆使したソフト作成（選択），ネットワークやWindows2000サーバの構築（共通），Web教材の作成（共通），ノンリニア編集機を使ったビデオ教材の作成（選択）等が行われた。

特に各研修員には，校務処理や授業実践を行う過程での日頃抱えている課題を提出してもらい，その中から課題解決に向けたソフト作成をめざして研修を深めてもらった。研修員は学校の業務や授業の在り方を問う過程で，当面する課題を明確にして解決に向けた道筋を一步踏み出すとともに，講座で学んだ知識や技術をソフト作成に応用実践することで課題解決に向けた技術を習得するよう研修計画を立て実施した。この基礎・基本の知識・技術の習得と課題解決型の研修過程は今日的な教育方法でもある。3ヶ月の研修過程を垣間見て，さらに研修成果報告会に参加した他の長期研修員に「3ヶ月研修員の研修成果をみて，すごくいい刺激を受けた。気持ちを引き締めて課題に取り組みたい。」と言わしめるほどであった。この研修過程を体験した研修員が学校現場へ戻り，課題解決へ向けた実践的取り組みが他の職員や児童生徒と関わる中で学校全体の姿勢として浸透して行くことが期待される。

研修課題として作成したソフトは，データベース（ACCESS）を使った面談資料作成，遅刻集計処理，日程表作成，実力テスト処理，児童生徒の個

人情報管理等が10本、Web作成ソフトを使った教材が養護学校での咀嚼指導や構音指導、聾学校での文章理解支援、進路指導データベース、情報発信としてのホームページ作成等の6本であった。特に、特殊教育諸学校の研修員が短期間の研修にもかかわらず弱かったり、現存する機能を補い、学びや訓練をサポートする観点からのコンピュータ活用法とその効果の大きさを示してくれたことは、教材作成の新たな展望を開くものであった。一例として、県立沖繩ろう学校、大城麻紀子教諭の研修成果の一部を紹介する。教諭は聴覚障害児の日本語獲得の学習過程で、語彙の理解や文章読解のために多くの視覚情報を活用することを考え、Web作成ソフトを使って画像やアニメーション機能による動画を作成し、教材の効果を検証した。調査は小学校3年「ありの行列」で、アニメーションを見せる前と後で児童の理解に大きな差があることを示した。また、「虫のゆりかご」では指定した語句を検索し、アニメーションや画像とリンクさせて語句の理解を助けたり、学習の目当てのページをつくり学習する内容がわかるように工夫した教材を作成した。

図2はオトシブミが葉を巻き上げるアニメの画面を表示している。



図2 Web教材の画面「まき上げる」
日頃の実践活動での教師自身の課題意識と解決

へ向けた意欲が、課題解決を支援する情報処理教育課の全課的な対応と柔軟な講座運営とあいまって、質・量共に深まる研修となった。

授業での活用を目指してスキルアップ

中学校パソコン教育利用講座

昨年度の「小学校パソコン教育利用講座」に引き続き、「中学校パソコン教育利用講座」を開設した。従来、このような講座は、夏季休業中に短期研修として行われるが、年度の初めから活用したいという現場のニーズに応えて、勤務終了後に自主研修として実施することになった。

講座は、「初心者を対象に、情報の収集や発信及びコミュニケーション手段としてのインターネットに関する研修を行い、その活用方法を習得するとともに、アプリケーションソフトの実技研修を通して、コンピュータを授業で活用できる教師を育成する」ことを目的として、6月5日から16日迄の間、5時30分から8時30分の3時間、6回18時間行なわれた。

研修内容は、情報モラルや著作権、インターネットのリンク集の作成、PowerPointの基礎と授業への活用、



図3 講座風景

Wordによる学級新聞づくりなど、授業などですぐ活用できることを目指している。

仕事を終えた後、駆けつける研修だけに、受講生の意気込みと熱気が感じられた。「時間も3時間たっぷり取れて実のある研修でした」「パワーポイントも少しわかるようになったので、自分なりに活用していきたい。また学年便りの作成も大変勉強になった」などの感想が寄せられた。

コンセプトは「授業でいかに活用するか」

二つの講座からもわかるように、センターの講座は、「コンピュータの操作ができる」から「コンピュータで指導できる」を目指した講座内容へとシフトしている。そして、すべての教員が「コンピュータで指導できる」ようにするための「教員情報リテラシー向上プロジェクト」も動き始めた。10月には小・中・高・特殊教育の各学校の校内リーダー養成講座も行なわれる。

「子どもたちが変わる」「授業が変わる」「学校が変わる」という状況はまじかな気がする。

ダウンロードしよう！

本教育センターでは、調査・研究活動、研修事業を通して学校現場での教育活動の支援をより機能的に行うためホームページを公開しました（平成13年2月27日）。特に今年度からは、これまでセンターが保有している実践成果としての指導案や教育素材、今日的課題に対する研修報告書等の一次情報を学校現場のニーズに応えるよう随時更新し、ホームページ上からダウンロードして活用できるようにしました。ただし、ご利用にあたってはパスワードの取得が必要です。原則として沖縄県内の教育機関に限り、パスワードを発行しています。簡単な手続きでパスワードが入手できるようになっていますので、詳細については、沖縄県立教育センターのホームページをご覧ください。アドレス：

<http://www.edu-c.pref.okinawa.jp/index.htm>

今なぜ、社会体験研修なのか？

教育経営研修課

1. 社会体験研修の意義

先頃、文部科学省から発表された「21世紀教育新生プラン」では、「教える「プロ」としての教師の育成」として「教員の社会体験研修の大幅な拡充」を推進しております。

社会体験研修は、教員が学校以外の施設等における諸活動を実際に体験することによって、社会人としての視野を広げるとともに、地域社会との連携を通し、教育が抱える課題に対処できる能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

また、時代のニーズである「開かれた学校づくり」の第一歩として、積極的に教員が学校外での「社会体験研修」を行うことはその足がかりとして非常に大切である。

このような状況を踏まえ、県教育委員会として、従来の初任者研修、教職10年経験者研修に加え、今年度から教職5年経験者研修においても「社会体験研修」を実施します。初任者研修においては「企業体験研修」、教職5年経験者研修においては「保育園体験研修」、教職10年経験者研修においては「福祉施設体験研修」ということで、出来る限り内容的に整合性を持たせ企画いたしました。

2. 社会体験研修実施期日

平成13年度

研修名	実施期間	研修場所
初任研	8/16～8/17	県内企業 (19ヶ所)
5年研	8/13～8/17	県内各保育所 (107ヶ所)
10年研	8/6～8/10	県内各老人ホーム (25ヶ所)

3. 社会体験研修の感想（平成12年度）

<初任者研修> 「企業研修（ビオスの丘）」

園の方々の熱い思いと仕事に対する責任感みたいなものを感じました。それぞれの方がそれぞれの分野で園のために働く姿は基本的なことかも知れないけどとても素敵で、その思いは、私たち教員も忘れてはいけない大切な思いだと感じました。蘭（らん）、植物は「短期間」で完成されるものではなく時間をかけてそれぞれの思いを込めて育てていくそうです。私たちも生徒たちにそういう「温かい思い」で接していかなければと思いました。とても楽しく充実した研修でした。

<教職10年経験者研修> 「保育園研修1」

子どもたちが最初に集団生活を学ぶのが「保育園」である。そこで3日間子どもたちと触れ合うことが出来たのは貴重な体験だったと言える。また、終日、休む暇もなく子どもたちに接する保母の皆さんのたいへんさも知ることが出来た。子どもたちを全員動かしつつ、一人ひとりの子どもへのフォローを忘れないようにするその態度とテクニックには感動する思いであった。今回の研修を通して我々高校教師も厳しい現状に負けることなく頑張らなければと改めて実感させられた。

<教職10年経験者研修> 「保育園研修2」

新しい知識を仕入れることも研修の目的の一つですが、今回の研修で大きかったのは「初心に戻る」ということでした。当たり前前に流されてきたことが当たり前じゃなかったことに気づく、忘れかけていた生徒への愛とその愛情の与え方を再確認する。私自身、リフレッシュできた貴重な体験でした。施設に入って直に何かを体験するという事は各種イベントや講演を聴くにしても個人的にはかなり困難を伴うものでエネルギーが必要です。今回のように行政側が「研修」という形で音頭をとって機会を設けることは大切なことですし、私自身、貴重な経験をさせてもらったことに感謝しています。

当センターの屋外施設「教育実習園」は岩石園、植物園、教材用池から構成されています。今回は、教育実習園の整備がスタートした当時、平成3年頃の状況と植物園についてその概略をまとめてみました。

<教育実習園の整備に向けて>

古都首里にあった当教育センターは事業拡大に伴い、昭和62年度、現在地へ移転しました。敷地は海岸近くの泥湿地を埋め立てた環境です。移転直後、構内の多くは路傍雑草の生い茂る草原で、中城湾からの潮風のため教材植物の栽培活動は極めて困難な状況でした。また当時、新しく示された学習指導要領において、小学校低学年への体験活動を重視した生活科の新設、理科においては小・中・高校一貫した観察実験の重視、また教科の枠を超えて一層、環境教育が重視されることなどが明らかになりました。当センターでは新教育課程に向けた条件整備の一環として、野外学習の場の確保と設備の充実が緊急の課題とされていました。

このような状況のもと、昭和63年と平成元年には、それぞれ理科研修課用温室1棟づつが設置されました。早速、山野で普通に見られる樹木の種子繁殖を手がけました。また平成2年度はフズリナ、アンモナイトなどの化石を含む本部石灰岩等を収集した岩石園1が設置され、教育センターの環境整備事業が本格的に動き出しました。

<教育実習園整備計画>

岩石園の整備に関しては本県に産する主要な岩石を収集し、各岩石は景観美を考慮しつつ変成岩、堆積岩、火成岩の3種類毎にまとめ、また島々の生い立ちを理解しやすいように生成された時代順に配置する計画がまとめられました。

沖縄の森林は地質の相違により、大きく2つに分けられ、その一つは石灰岩地域や低地の森林で熱帯系植物のアコウ、ガジュマル、ハマイヌビワなどイチジク属の植物が多いのが特徴です。他は山地のイタジイ、オキナワウラジロガシなどドングリをつけるブナ科植物主体の森です。

人里や学校では熱帯花木類と自生種の樹木が

混在して植栽され、6～7割は帰化植物や栽培植物に占められ、地域本来の自然は極端に少ない状況です。さらに、亜熱帯に位置する本県の場合、代替教材が必要です。

そこで、当センターの環境整備は、地域の自然のエッセンスを収集し身近な自然を学習する場あるいは野外における自然観察の事前及び事後学習の場として位置づけ、教育センターの敷地全体に関するマスタープランの作成が試みられました。

なお、緑化を進めるには、もともとマングローブ泥湿地を埋め立てた敷地で排水が極端に悪く、植栽木に適する土壌を客土するなどの思い切った基盤からの整備が計画されました。

<教育実習園工事のあらまし>

平成3年度「花と緑と野鳥の住む環境づくり」を合い言葉に、当時の教育センター所長、崎原盛喜先生の陣頭指揮の下、岩石園、教材園の整備が急ピッチに取り組みされました。年度始めには崎原所長自ら、近隣市町村、教育関係等の公的機関へ岩石や植物、さらに客土用土の提供依頼を精力的に行いました。同年の6月には重量約300トン、個数にして約300個の岩石が沖縄本島、久米島、石垣島から搬入されました。そのほとんどは市町村や関連企業の厚意によるものでした。これらの岩石は理科技術家庭棟の西側に岩石園2として学習用に意図的に配置されました。

植栽環境の整備はまず、自生植物用客土として国頭マーヅ(300m³)、ジャーガル(200m³)がそれぞれ特殊教育棟周辺に客土され、続いて



写真1 整備当時の特殊棟南側島尻の森周辺

近隣の土木事業で出た残土ニーピ土を関係業者の厚意により無償で10トンダンプ450台分を情報教育棟、宿泊棟周辺に搬入し基盤整備は9月にほぼ完了しました。

無償譲渡や協力依頼に応じて頂いた方々は近隣市町村、各農林高校、自然の家、地域の篤志家の方々から年間を通して岩石提供13件、樹木提供37件、運搬・資材提供等22件、合わせて71件、県教育庁、教育センター内の関係者からの樹木提供等を合わせると悠に100件を超すものとなりました。多くの方々のご支援のおかげで12月までには苗木、成木合わせて約150種、約3000本を、マスタープランに基づき国頭の森、島尻の森、郷土植物の広場、熱帯花木の広場等、各観察予定地に植栽することができました。

平成4年1月18日、環境整備事業の一応の竣工を記念した大感謝会が盛大に開催されました。

<教育実習園の充実に向けて>

平成4年度には、湧水対策用さく井工事完了、1日の取水量は約100トンが見込まれ、前年度の干魃時への懸念も解消されました。

平成5年度は本館南側の各研修棟に囲まれた中庭に教材用池が竣工、造成中の植物園とともに緑豊かな自然環境への期待が膨らんでいました。

平成6年以降は植栽された樹木の維持管理や仮植えされた樹木の本植えとその管理、水生生物や蝶の食草の増殖、教材用池へのせせらぎの追加、あるいはビオトープの試作など教育センター内の自然環境は量的にも質的にも充実してきました。また平成6年頃から、毎朝、各課に割り当てられた分担区域の維持管理を続けながら、さらに毎週、金曜日には午後2時間程度を、所員・研修員の交流をねらいにボランティア活動としてのフラワーフライデーを設定し、敷地全体の環境整備が図られてきました。

本格的な植栽工事から10年後の平成13年3月現在、当センターには、シダ植物以上の維管束植物が自生種約300種、移入種約300種計約600種の植物が植栽されています。

国頭の森付近では普通に見られる種としてイタジイ、コバンモチ、アデク、モッコクなど、また琉球の固有種としてイジュ、オキナワウラジロガシ、オキナワイボタ、ムッチャガラ、リュウキュウマツ、島尻の森付近ではガジュマル、アコウ、オオバイヌビワ、アカギなどの普通種、

固有種としてオキナワヒメウツギ、リュウキュウボタンズルがそれぞれ観察されます。教材用池付近では絶滅危惧種としてあげられているコウトウシュウカイドウ、マツバラシ、モクビャッコウなどが観察できます。



写真2 現在の理科教材池周辺（後方は特殊棟全景）

また、センター内には有用植物としては観賞用草花・花木類オーロラコンロンカ、ブーゲンビレア、サンダンカ等約190種、野生の食用植物アダン、シマグワ等約25種、熱帯果樹ゴレンシ、パイナップル、マンゴー等約30種、薬用植物クチナシ、クミスクチン、シモン1号等約50種、チョウの食草イヌビワ、ギョボク、ホウライカガミ等約40種などが見られます。その他、ヒハツモドキ、ニッケイ（香辛料植物）、オキナワシャリンバイ、サキシマスオウノキ（染料植物）、ラミー、ケナフ（繊維植物）、カジノキ（和紙）などが植栽されています。

当センターの緑化環境の整備は、歴代所長のリーダーシップのもとで、所員・長研員の献身的なボランティア活動により、埋立地の緑化を手がけ、日常の維持管理等すべて自前という「手づくりの教育環境」が創出されつつあります。

総合的な学習の時間を新設した新教育課程の本格実施が目前に迫る中、本施設は、幼・小・中・高校における自然観察学習あるいは自然体験学習の場としてその活用が大いに期待されます。（文責 島袋、大城）

不登校児童生徒の支援の在り方について考える

教育経営研修課

現在、沖縄県内には11の適応指導教室が開設され、不登校児童生徒への支援が行われています。そして沖縄県適応指導教室連絡協議会が設置されて、5年目を迎えます。これまでに講演会、シンポジウム、研究会等を実施してきましたが、たくさんの先生方のご支援のもと回を重ねるごとに年々、充実してきています。

さて、今回、平成13年度全国適応指導教室連絡協議会四国・九州地域会議が本県で行われることになり、適応指導教室の全国的なネットワークづくりに絶好の機会だと喜んでいただいているところで、多くの先生方のご参加により大会を盛り上げていただきますようご案内いたします。

1 名称 平成13年度全国適応指導教室連絡協議会四国・九州地域会議

2 期日 平成13年11月15日(木)・16日(金)

3 会場 沖縄県女性総合センター「ているる」

4 参加者 学校の先生方、養護教諭、教育相談担当者、
県市町村教育委員会の教育相談担当者等



5 日程

1日目 11月15日(木)

13:00	13:30	14:00	14:10	15:40	16:00	17:15	18:20	20:30
受付	開会行事	休憩	講演	休憩	ふれあいコンサート	移動	情報交換	

2日目 11月16日(金)

9:15	9:45	10:25	10:35	11:15	11:20	11:40	12:05	12:15	12:35
受付	連絡分科会 実践発表	休憩	分科会 実践発表	休憩	協議 質疑答 指導助言		移動	閉会行事	

講演

演題 「 これからの不登校児童生徒への支援の在り方について 」

- 適応指導教室からみえるもの -

講師 琉球大学教育学部 教授 新里 里春

ふれあいコンサート テーマ 「 いつか夢をつかむまで 」

出演者 ふれあいバンド(適応指導教室卒級生他)

第1分科会(小・中学生への適応) 実践 : 福岡県 実践 : 沖縄県

第2分科会(高校生への適応指導) 実践 : 愛媛県 実践 : 沖縄県

< 連絡先 >

沖縄県立教育センター

「 沖縄県適応指導教室連絡協議会事務局 担当 辺土名則子 」

〒904 2174 沖縄県沖縄市字与儀 587 番地

098 933 7518 FAX 098 933 7518

「教育センター トピックス」

「センターには蝶がチョーいっぱい！」

理科研修課;大湾 宏(初等理科研究室研究主事)

国内のチョウ類では最大とされている、オオゴマダラが今年も6月に飛来し、当センターに研修のために訪れた先生方の目を楽しませています。

オオゴマダラはマダラチョウ科に属し、白地に黒色の模様の大きな羽をゆっくり動かし優雅に飛びます。幼虫時代に毒の強いキョウチクトウ科のホウライカガミを食べているため鳥も食べません。そのためでしょう人が寄ってきてもなかなか逃げません。



オオゴマダラ幼虫

涼しい朝には、10頭のオオゴマダラが他のチョウといっしょに乱舞するシーンがよく見られます。「まるでお伽の国に迷い込んだようだ」と研修員の声が聞こえます。飛んできたオオゴマダラは、センター内に植えた食草に産卵し、たくさんの幼虫を残してくれます。やがて黄金色の蛹になり、成虫となって再びセンターを「お伽の国」にしてくれます。初等理科研究室では5～6年前からチョウハウス作りの学校を支援するために、チョウの食草の栽培をはじめました。

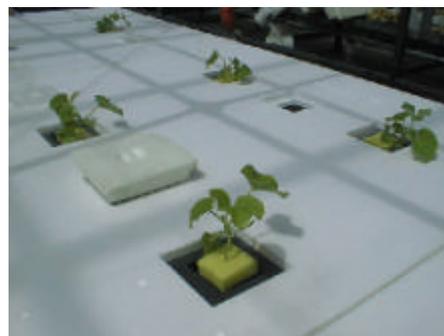
今では、ホウライカガミを始めトウワタ(カバマダラの食草)、ツルモウリンカ(アサギマダラの食草)、ギョボク(ツマベニチョウの食草)、ナンバンサイカチ(キチョウの食草)などが温室で栽培されています。特にホウライカガミは500鉢の苗を準備し、必要な学校に提供したいと考えています。



オオゴマダラの成虫

「メロン栽培への挑戦！」

～野菜の品質に及ぼす栽培技術の研究～
分析システム研究室 本永直利



定植の様子



収穫の様子

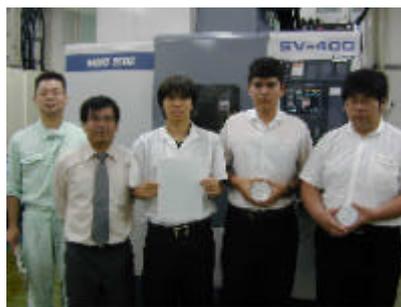
産業教育課分析システム研究室では環境制御を含めた水耕栽培技術の基本操作を学習するために、メロン栽培に取り組み、生育調査等も行った。

農業(バイオ)&工業(FMS)の協力研究

「高付加価値メロンへの挑戦」

平成11年度の文字メロン予備試験では、カッターで直接文字を刻んでいました。12年度からは、コンピュータでデザインしたものをもとにプラスチックを使用したり、13年度はシール式用紙で工夫してきましたが、手作業だと時間がかかります。

そこで、スタンプ式に改善できないかと、産業教育課FMS研究室の協力により、プラスチック刃とアルミ刃の型を製作し、試験を行っています。



北部農林高校熱帯農業科生徒&FMS 研究室研修員, 指導主事